

トマト青枯病耐病性台木品種の耐病性比較

1 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

トマト・ミニトマト抑制作型で問題となるトマト青枯病は土壌病害であり、その対策として土壌消毒および耐病性台木による接木栽培などがあげられる。ミニトマト産地ではトマト青枯病耐病性台木の‘キャディ1号’（トキタ種苗）または‘がんばる根ベクト’（愛三種苗）が用いられている。耐病性台木品種は、各メーカーから多数販売され、メーカー毎に耐病性が評価されているが、これら品種を同一圃場で耐病性比較した事例はほとんどない。

そこで、トマト青枯病汚染圃場において各種耐病性台木品種の耐病性を比較し、有望品種として選定した。

(2) 情報・成果の要約

抑制ミニトマトにおいて、品種‘キャディ1号’の接木栽培で各種青枯病耐病性台木品種を比較した結果、‘グランシールド’（サカタのタネ）および‘キングバリア’（タキイ種苗）は耐病性が高く、トマト青枯病発生圃場における接木栽培の台木品種として有望であった。

2 試験成果の概要

(1) 2018、2019、2021年の3か年、ミニトマト抑制作型（7月定植）において、各種青枯病耐病性台木にミニトマト品種‘サンチェリーピュア’をチューブ接ぎして定植し、トマト青枯病の発病程度を比較した。栽培管理は現地栽培基準に準じた。

(2) 2018年試験結果（データ略）

園芸試験場内の汚染圃場において、対照品種‘キャディ1号’より耐病性が高かったのは‘グランシールド’‘キングバリア’‘がんばる根フォルテ’‘Bバリア’‘シャットアウト’であった。

(3) 2019年試験結果

同一圃場において、対照品種‘キャディ1号’および‘がんばる根ベクト’より耐病性が高かったのは‘グランシールド’および‘キングバリア’であった（図1）。

(4) 2021年試験結果

同一圃場において、対照品種‘キャディ1号’より耐病性が高かったのは‘グランシールド’および‘キングバリア’であった（図2）。

3 利用上の留意点

- (1) 青枯病甚発生圃場で栽培する場合は土壌消毒との併用が望ましい。
- (2) 青枯病以外の土壌病害の発生が見られる場合は、メーカー資料から対応する土壌病害病との複合耐病性台木を用いる。
- (3) 台木品種によっては穂木の収量性が異なる場合があるので、事前の栽培試験およびメーカー資料を参考に導入を判断する。
- (4) 異なる穂木品種および作型での利用については、事前の栽培試験により適応性を判断する。

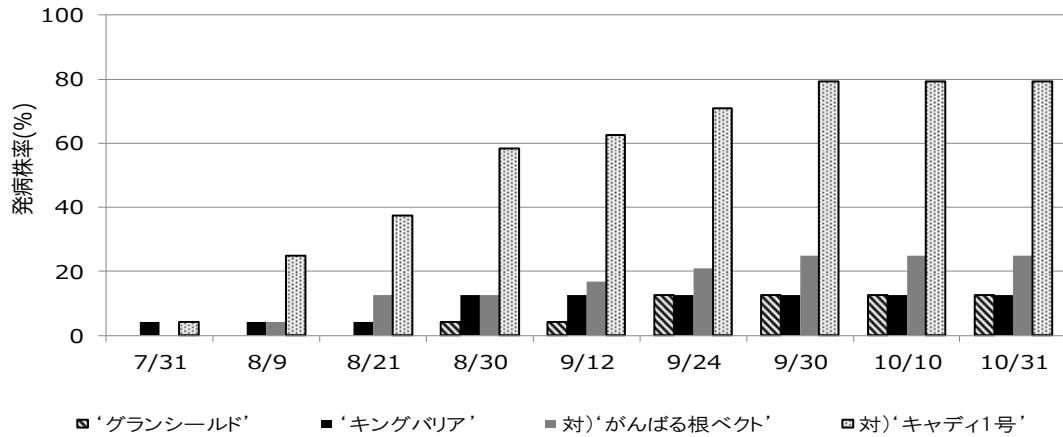


図1 各種トマト台木品種におけるトマト青枯病発病株率の推移(2019)

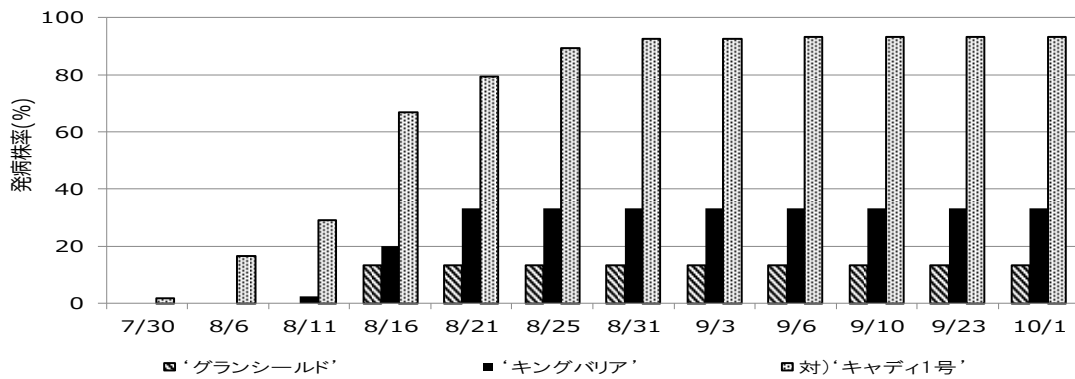


図2 各種トマト台木品種におけるトマト青枯病発病株率の推移(2021)

(参考) 供試台木品種

品 種 名	種苗会社	青枯病	F	J 3	K	V	N	Cmm
グランシールド	サカタのタネ	10	1~3	○	9	1	○	○
キングバリア	タキイ種苗	10	1~3	○	7	1~2	○	○
シャットアウト	サカタのタネ	8	1~3	○	9	1	○	
Bバリア	タキイ種苗	9	1~2	○	1	1	○	○
がんばる根フォルテ	愛三種苗	9.5	1~2	○	6	1	○	
がんばる根ベクト	愛三種苗	9	1~2	○	5	1	○	
キャディ1号	トキタ種苗	8	1~2	○	7		○	

※掲載情報は各メーカー資料を参考に記載（青枯病耐病性程度は5段階評価の場合、2倍して10段階に変換）
 青枯病(1~10)、F：萎凋病レース(1~3)、J 3：根腐萎凋病、K：褐色根腐病(1~10)、
 V：半身萎凋病レース(1、2)、N：サツマイモネコブセンチュウ、Cmm：かいよう病
 ○は耐病性あり、空白はメーカー資料記載がないことを示す

4 試験担当者

環境研究室 主任研究員 田中陽子
 研究員 松村和洋*
 室 長 米村善栄

*現 農業試験場 有機・特別栽培研究室研究員